素書抄の傳 下

へ13
2937
6

特
へ13
2937
6

春色戀染分解二編巻之下

江戸　朧月亭有人著

早稲田文庫

第十一回

夜叉紙をみ置初霜と掛ひつ卅の枕よりのまくてび嬢
と云元河内の高槻甲斐の更まるける附屋敷
ある所とうや主甲斐の丹波ゑより周流をすて人
玉川人新狂みを連だちし一群ハふ金と長一
外ハ第ニ一の源七と清元稽次郎こふ尾市

うち連て長崎坂まで来ル途中平野刻ゆさぶりこ
見バ「ぞうも皆の足の一歩ハ多ノ山海林ち
中ク日のあるうち出戸まで八ものづゝ」せ「長崎の
足の足ハ山もあるを見らア私こうこふ尾の足の一歩のあ
程よりるヨ」「余りおめ人さんぐさう名ぐのでわ南寺山で
新角を寺中さ於麻の池の徳利紙源氏ゲ物へぶつつ
なり風紙接て京徳利ばば後生大ゴ小提て来るうちゲ
面白いく」「そろハ大勢人海ゴ源氏ハ中くえ

移人せ「イヤハヤ知ら見ぐ人生ぐ丈ア」「人も源公ハ余ッ程
おそさとえる人」「ゆうチワト静ホ歩めてかんこ者ハ
見ゲ様ア生ゆうホ者ハさハ光御ホでも来やアまちへ
「丈ぐうう駕ふ家ン私人ものぐ」「私ア駕ハ程サ人で
家ンぐうう吹ア私ア微しへのヨ」「ア見おやア私ゲ
相駕ふ家やせう」「程ナるかまちんゑんぞと」「丈ぐ
私ゲ脊負てあげやせう」「程ア程ア」「見ハ程者の
託宣「ア人の人表ちゑんゑ〜バ」「どうだう知りませんヨ

このまんぐんしち　ひぐ　て
此附源七八たりの身よ御米提右の目不徳利屋
さげて　ゆくぎく　来る　ふそ「来さく」「さえ人ぬ
きめう　ありの形ぐかけて来る人「源公おめ人きうしと
ナゼ　御米さげて来るのぞ「あんまりあめくさんをぐ
かいたて　足ふあさいまんくう一生ろんめいふかけ出ざ　まんと
ゆくぐっつけまーさう徳利の底ぐぬけて油ぐ御米ふ
ぞりさりかりさも　初ーゆくゆくて歩いまんと犬ぐむ米
ふ足人かくまんくう病犬うと思うくその油とるめる

源公二下ノ二

ゆつさい乳ぐ　つくくるとゆ物のうるさあんとも　かとも
いんやせんくうそこで御米もぬぐこくじもた紀ぐて
ふひの卵よ五号ぞまーくこんるひどいめふ出ぞ
さあ人ふ号せん　ゆのみ　てもあ臭ぐきまてたまくわ人
いろふ意ぐとりて余りざ「トキニ足れとらで一ふくゆり
の一盃春のへぞりで高西りう「そのうの絵よ車拍ドコたりと
の様高ぞり、コく　金「ヨヤくゆ公多尾さん大家数
あんぞで涌るくうヨハくく　絵「イヤハヤ御米も絵ゆ米ッぬい

源助
三平
尾太郎

小金
竹三
福二郎

源八 源七 ひぐ 振こぼ さ〜〜〜

よろこび「是まさ池の傳ノ子「池へぜんこと天ぐ
気ゲ高へくッイ笠深ホ岳キ一ゴ新ハ孔雀ひ
「ゴるゴどこらつへ池の持せ人グるるさ人
是よノ郷の山警二挺持参りれバ一挺ハ小金銭
糸弦一挺ハ参るゴ〳〵拵奏弦ひハ参ホ参ホ参ホ
参ホ亡ロ乙ト也ア世の人ノ旅籠屋ト
参ホれバ女房女中是ハ同者ハ乃機嫌よろ〳〵
おすゴだとお定まりの接拶ホ是ホ是ホすゴ

湯治ハ接ホ参ホ〳〵
「ヤい〳〵茶ホ外ホ〳〵「吏ホ接ホん〳〵ハ頂ゴ
ホ人「ハも先生ゴ〳〵ハ情ホ人ホ参ホ実ホ孔ホも附
ホ参ゴゴ一接ホも附ホ参ゴゴ江川町ホ拵ホ参バ〳〵
さうハ参ホ出ちゃア拵ホハあゴッ〳〵ゴ
トキニ拵ホ先刻暗ホ〳〵田甫へ出るホの大ホ接の下で
一句〳〵ホ中ホ「ホハ何ひ人の
「参ホ接て前参ホ〳〵ホ蔵ホハゴ〳〵ゴ

「長い中く感吟ざ」「今ノウちよいと主水のよ
みなまみ川の流まの水とんまのるでまろまへノまみ川
とうへ海金も変うう出さのでまろ」「又ろろろ和人事を
いひ出さ」「全体長れまみ川へうくみ文字を出事ろ
矢ッ張まとうへ字がようろ」「ろ指ョノ和名
新聚抄へ矢蘆とうひ」「万葉集へ矢蘆とあり武
蔵風ち花へ矢蘆とあるうう蘆花とてろうろ
ら指へト」「この川へ丹波山ろ出く多

蘆の郡の丹波村へ流ろうう多丹波川ざと山係の分限
帳とうへあふまきとう」「又日蓮記ろうへ武
蔵の国田波川の巻ろ七瀬を糸まべ」とうへるのある
さうで丈」「流ちちくぶ方ちちくぶ方ちの丹生ざのと
いうへ皆まと出ろう出まみ川とうへうつ丈と出ろう
ろあさうめとうへるのョ」「そんろうまろ玉帳の玉
「新まのま」「金まのま」「伝説まもいのさ長ろ
出ろうぶ代ろ金長ろう来さ」ろうへのハうろまざの

福「貴一郎さんが結ッて貰ッたのがあるやうだ」　今「やうぐさんまんにょ福さん
ぢうせうんなかたくざうト　湖ぐ　三「ぶぶぐ一ぢん云ふ
ぐぶぐぜ　福「樊付ちやいみわ人今ッ迄ッ　福「おるる湖ぐ樊付
やんぢうぐぜ　今「面ア男やぐ迄ト　福「ぶぶ家ぶぶ　三「磯よあるい福
次第ぐ今私ぐ家張ぐ人一武者ハよ石せうト　福「家ぶぶ藤ぶ　福「ぶぶ家ぶぶ
三「清麗中の乃者ぐぐるる乃者ぐくとぶつまる武者　源「
イヨ捕、樊やアリ　福「福さんの源公人へよるらうトント長源
屋のやうぐ　今「あんまりお餐ぐ多のつみあがりまさア　福「ひぐ

福まんさうちぐらく〳〵　今「源公人とのくバふたさんハかれの
ぐぐでスヨ長者さんの出来ものうちハぐ合月でも三百五十ッ
器ぐるうッるのハるのやうぐと表先ものぐぐ百五十
うッ面ぐるわて寿さ人ッ代ハぐうッるると二百もぐ
けて結むことのんぐぐあうまハ丈でも宅の婦さんとッ人
人ぐ分別くみまるうッ歳月世ものんぐくぐくらのやうる
人ぐや　みません夫法面ぐ　福「ぐ長者さんのとものんぐ武蔵
寿みくわまるハ　福「さうわ人部と表ッハ小方さんハ

極ひざの先ゞ高へのとらく人伴判でー与ゞ子「さう思い
人ゞ和ろろゞ見ると拾未のろへのョ牡丹みも、笑ツく
えるさ是仏主で唯和ろくかろへのゞ歳位ョ「えは一
ぢや戸前ひとつのろ沼ろ子「考しあく人のやろる
沼田様ゞやえゞまゞ考人「内宮さんよ若男をおひ考て
ろのゞ一ぢん乗ろゞぶのまを「見ぢや私の居あろしゞ
初まツとやろゞ「トキニやろ酒ハ書みて御平て腹ると表
ゆう「えはゞ結様サヲ〳〵拾あくしてゞろろとはして御と

表やせろ
見よろ強よく冷ろもそのひ寄く洗ヶよりろく
小金と表こハ田甫のろ有る二階よ人くと座敷を
長みろく藤ろるろと表ろ人
「ろ和ゞく破さ考んとろく家ろトやれ人ろ「星の洗ろみ
末ゞろ〳〵裏表ろゞでせろろ子さろしてとんる要ある人ハ気
ゞせのく〳〵て不発と表ゞ世ゞ「我竜と表ろゞ表の表
代さゞで変ふ力考ゞさろのゞ気ゞ表ろ人

ものもけ月のもぐ〳〵寝るのもあり仲ね人「まつ実よりく知恵
でもたね人見でもでもなでもでもなでも

るーはがおあのだまさて先の毛までぬるはもあるこの
れんぞ中まとまと伝切のもてまるあ紙自色の方色紙
でもいくらかご「お天気のいく世人うち数の者がいと
常識やれんまの実の吹ーョお家のいくとご世事ごのんご
くくんのいくのも世ものの同へるのご「ヨヤ悪ご考」
あるてお長ものが本分ものまの実ものふ方さんご者番ごの
お金さんご温泉のお業さんご者気ごのおまさんいくを
だのとおるまりさうもきらうと見「見りやをこの坂

金で常識よ推がいくくるのくろ別ふかるれんうのご
くうおおのまんでも雑いまのんのョまの実よ あくろくつて云
月ふやまさうおおのまんごやらふあんごやんれんくつまくれんく
とくれるるさん方ト「マアおちちョ家気ちて世ッ
てまの実よ痛ませう更ちやアン推ふる外のんよ悩てるのよや
ありませんのご子「あごぼうョ「わうぼうよ「さうごョ
金「ア「嬉ーい新ーくくるくくしくるうちいくうまく明音宅へ
ゆるると又中まくまふ怒まるョはご分ってをこん推くくるまを い

ぜんそ　ぜんそ　ぜんそ　ぜんそ　ぜんそ

お茶さんハ又私の白紙ニ書ク
「そのハ面白ウ
こゞみでもコ
のやたんの
物のとろ
言さのハ
お楽さんと
いってるンでもコ

おぢさんのまゝ
「こゞ
お客ハその人ひとり
お夏さんの清雅さんハ生まれ
道中で林屋とからひきまろさンでもゞ
名をお勢のゞさうでもの
涙ゞ
欲六さんを
「ゑ
お楽さ
林屋ハ

欲六さんの二注とゝ人のハ
ゝ人ハ
一すじ
「ゑん
今ハ
「ゑ
「ハイ
「ハイ
「ゑ
「ゑ

ハ別でもゝ
一ツ
ハ
ハ
ハ

若夫婦とくのゞみこハナ「ヲヤ助さんなるほどまれに伺ふ有る
繼て来さハ「ちつとのんでゆらうう「おまたんのめのまもた
くゝ私のも様でおくんなさいナ「自己のを先へのんでくれ
「私のゞ先でかくっちや拙サ「虫のいゝ工張云ッたくさんざ
のまして変て逝ゆうと云って「伺人つみ出月あんでもまち
の茶やでお湯へ逃へさ洗ひッとちやう伺ぞといのく
私ゝ先へ洗ひして変てさッさと上って仕舞さゝやみ「まだ
奏でいとうト「あゝ人ぞんくゝ来るの「

「そんなゝひゞゝ、ちちやア痛いやうトかくたいひもゝた業
なるほどさ同士のきゝ中ゝ、ゝ量の樂ゝ、ゝんゝ
くゝ知らつの秋異北者とゝありて無と云ゝ又雲とゝ極ゝく
鶯鳴つゞけゝゝれど緑森の乳樂ハ家ゝぐのゝ見ひもゝく矢
窓のゝ人旭のさゝゝゝ夢ゝ紀純いづるゝ来りて陽く生る者りと
ゝゝゝ房揚枝を今人拝して湯殿ゝ集ひ一ヨおゝうの接
投ありて第ゝ紙洋まるゝちひゝの花姿の
そのひゝれバ君ゝの世変へ集るゝちゝ人ゝ「あゝこゝ

ねてゐるくらいなもの

「私やまだ寝ぼけまなこ」

まんぢりともせぬ夜が明けてゐる

源「あんでもタアのこまハ福さんが

死さるくまで生きるまでもサ

気がみてさ格ぢやうくあれ中ふ猪ドこんぢ旁まるもあれねへ

「学者かるくまで女房を亭主人も油ぢがあるねへ」

こまハ

さんぢ濡衣ぢ潮へ板を入さのぢ気よあるくあるまやせん

くくあ中紙絶して煽板を貴ッこのザ「おぢくらひ板ちうち

ぐらく」

「ちこ」まで「ッこい」こあ鹿の服とあのこうちぢあらへ

後「滅や人の報念ハ、ちあ紙あるくあまぢ狂白をううこ

ゆくこ。洞布里で濡衣の千鳥」ハぢうでま

「晨ハ明月

くくの赤るぢナント私の赤ちこハ又格別ぢのライこあ鹿後江第

自分も一首くかんぢ。秋の夜のあまり漫あたかくこのやまハ

の滅よ明のこる月」ハぢうぢ

後「晨ハ秀逸」小金さん変人来

てぢらくじろ「我程ハ、赤ちこ

「ヨ、ふあさんよ遠ひあいぢして、変あか出みること

教ぐ

くらう小方さんよ初くせてあぢくこ子

「ドレどこあ

「あまこあ

小金

太多三

草花戒指てうたくかる人サ今あつちを向くちらでみたろう
初生多いのでもアレこつち戒方向向きつさ「ある御堂さんは
遠ひわい「ナニ堂さんグア成程堂さんぞ「ドレく御判の
堂さんをりて雲やせう成程く男ぞ人田舎源氏の光氏
をのう世話物りてお人の蔵丸帝ふ助ちやの弟戒りさ
せうぞ「ドレく成程く男ぞ見ぢやふ方さんもくひ迄
ぢりの居る見人形やきさア御判首ぐありやア猫ふぢぐ
拵んでおやを「ぞうビしてお月ふ見て変ふお主のうみ戒ぐく

小方さんふ初つせて上ての子「丈ぢや形ちやう伝西ふお主ぐさ
るのう十で此の家の実さくあくほ」分ふ紙くく小金と源氏と二人
で淫て小方さんの若男とーてかた主の拵ふもうくうとお物を
ちて又ぞうふ人御で変よかを主のくと戒お関中ていうれ人くく上
自己の自滝よりたさうあくぞのやりふもう形拵ふのつく上
「人「合「ア「お拵ーてとておんふ人の丈ぢやけで出ていうう子「
形ぐ出て「ふやせう「丈ぢや御成帝ふ人「御成帝ふ人へ拵ーぶ「どあく
御「ちつなう自くう中くと伝で也男ぐいくくく女中祝ふ出くさくうあく

[illegible]
かいるぐらうと言て世さんまで蕎はしいのふせのくえさうかたの蕎
麥をまうたり 溜り中〜さ式一ゐるあのさ 濃の 兎ゲ 茶屋さんの
主の 親戚ぐさうを主 ゆう 温食でさるお屋敷ゆうお殿の富
を 貰よ 金さうまうたり 者ことゆで まうお屋敷ゆう 見物商人と
法華宗 ゆうと 幾〜くらふさうで まうゆう 寺 富の 当 まで 人 牙
城 ゆんでお主 ゆさるのでさうで まうゆう お 人 金のも 惜 る 史
あまとふ えゆる ちのさる 法華よ おを みさるとの 今 で ス 「
史 ハ 何 ゆ〜 ても お 釣の 毒 ゆう みぐ 史 ぢ や 自己 門 ゆう で

一ツ 西よ 雑ゆう ゆ 表 面 ちの 紙 たの むゼトとの 吻 の
うちふ 釣 仮 も 拝 茶 ゆう れば ゆう く 極よく 食 ゆ を
その ひ 形 ちのごとく 茶 当 の 法 居 よ ぐ 紀 ふ 金 と 者
ニハ ふ 宗 法 の 法 よ 初 ま 居 く 物 の 源 ち ふ 門 紙 ゆ と
多 ハ せ ゆ ま び 内 ゆう 六 十 を 紀 茶 の 出 来 ゆ 「 ぐ る
拝 ゆ ハ 家 下 ま せ 及 ゲ 茶 法 用 ゆ ゆ 家 の 方 へ お 出 る
ま ゆ く 中 さ ハ ま ゆ 「 イ エ ゆ く ふ 一 見 形 ふ お 月 ふ か ゆ
て お 吻 〜 中 〜 ふ ハ ま も あ り 又 何 ひ 〜 ふ 茶 も ぐ ふ の 手 法

変じて所ふるふるまひをうるめでハぐざのま
せぬ柳川舞の源七と中めざとたぶ紙を作ッく
ぐざのまゝトらの夫国つみく奥より法雲ハ玉来り
立より糠くの地がうり小金の寒さ蓑三の男乳
ゆて茶雪の糸四郎ゲ身のこゝり晴ゑの像より
お重ハ重の丹とゆりて二右との長金まさお重
小万茶雪ゲたゆふ三乳紙のこゝりお夏清雅小
ゲ身のう人且義三の紙ふ和ろの幸ゆりく小金ゲ

身ふ和ろの巻紙塗七そゝり三海ふゆりてとゞ
くゆ解まゞし

春色恋染分解二編巻之下終